

長崎方言におけるアクセントの変化

松浦, 年男
北星学園大学

佐藤, 久美子
長崎外国語大学

<https://doi.org/10.15017/1655029>

出版情報 : 九州大学言語学論集. 36, pp.255-270, 2016. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室
バージョン :
権利関係 :

長崎方言におけるアクセントの変化

松浦 年男
(北星学園大学)
yearman@kyudai.jp

佐藤 久美子
(長崎外国語大学)
sato@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp

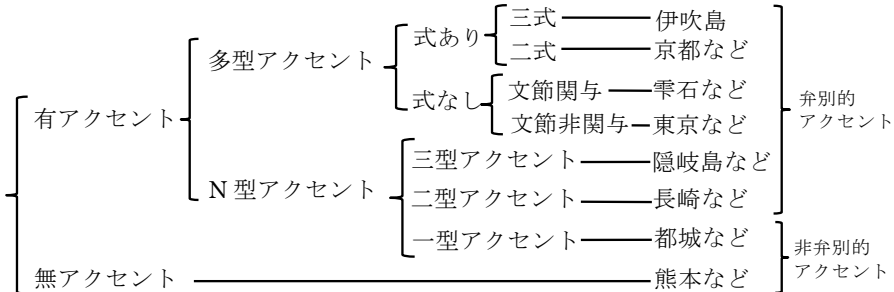
キーワード：長崎方言，アクセント，品詞，語種

1. はじめに

1.1. アクセントの地域的多様性と分布の規則性

日本語はそのアクセント体系に地域的な多様性が認められる。方言アクセントの分類は様々あるが、標準的なもののひとつとして上野(1989)による(1)の分類がある。

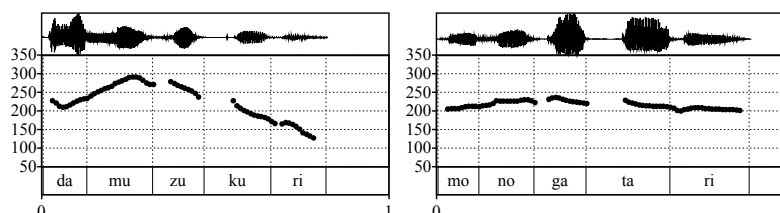
(1) 上野(1989)によるアクセントの分類 (一部簡略化)



本稿が対象とする長崎方言は二型アクセントを持つ方言のひとつである。二型アクセント方言は九州地方の西南部には長崎県から有明海沿岸を経て鹿児島県にかけて分布している。

二型アクセント方言は語内で下降がある型と、下降がない型の2つに分かれ、多くの方言では前者をA型、後者をB型と呼んでいる(平山1951)。長崎方言ではA型は第2モーラに下がり目があり語末に向かって下がり、B型は平板ないしは語末が上昇する。

(2) 長崎方言のアクセントの音声実現



A 型：ダム作り

B 型：物語

この A 型と B 型の分布には一定の規則性が見られる。松浦(2014)などによって、異なるアクセント体系を持つ標準語（東京方言）と強い対応関係が指摘されている。この強い対応関係が顕著に観察されるものに外来語がある。長崎方言の外来語は標準語において初頭 2 モーラにアクセントがある場合は A 型，3 モーラ目以降にアクセントがある，または平板型の場合は B 型になる傾向が強い。

(3) 外来語の対応関係（東京は語頭からモーラ単位で数えたアクセント位置を，長崎はアクセント型を表している）。

	テクニック	プレゼント	オルゴール	アルコール
東京	1	2	3	0
長崎	A 型	A 型	B 型	B 型

さらにこの対応関係に世代差があることも指摘されている。松浦(2014)によると，若年層の外来語アクセントの分布を見たとき，若年層の方が高年層よりも標準語アクセントとの一致率が高くなっており，高年層では 83.7%だった一致率が若年層では 90.6%と上昇している。

若年層に見られる標準語アクセントとの一致率の上昇はランダムに起こっているのではなく，一定のパターンに従っている。そのパターンとは標準語の語彙的なアクセントに従っているというものである。標準語における外来語アクセントは規則的な側面がある。有名なものとして後ろから数えて 3 モーラ目を含む音節にアクセントを置くという規則（逆 3 型規則）がある（McCawley 1968）。この規則によって，トラブルやストライクのように後ろから 3 モーラ目にアクセントがある場合と，サービスやエンジンのように後ろから 4 モーラ目にアクセントが

ある場合とを統一的に記述することができる¹。

(4) 逆3型規則

後ろから3モーラ目を含む音節にアクセントを付与せよ

(5) 適用例

プ'ラム, トラ'ブル, サ'ービス, エ'ンジン, ストラ'イク, エトセ
'トラ, グロー'バル, マクドナルド, ナイチンゲ'ール

一方で外来語にはアメリカ^ˈやプロペラ^ˈなどといった平板型アクセントを取るものもある。これらのパターンについて Kubozono (1996)は(6)にある3つの条件を満たした外来語が平板型になりやすいという一般化を示している。

(6) 外来語アクセントの平板型条件

- a. 長さ: 4モーラ
- b. 音節: 語末が軽音節の連続
- c. 母音: 語末が非挿入母音²

(7) 適用例

アイダホ^ˈ, オーロラ^ˈ, コンテナ^ˈ, ミネソタ^ˈ, ドリフト^ˈ

上述したように長崎方言において外来語のアクセントは標準語におけるアクセントの有無・位置に対応する。世代ごとの対応数・率を(8)に示す。

¹ 以下,アクセントの下がり目に ' を付し,平板型の場合には語末に ˈ を付す。

² ただし, c のように挿入母音を用いた一般化ではマ'ナスルやティ'ラミスなどが説明できないという問題がある(松浦2014)。

(8) 標準語との規則的対応 (松浦 2014)

	高年層		中年層		若年層	
	A 型	B 型	A 型	B 型	A 型	B 型
初頭 2 モーラ	248 (93.2%)	18 (6.8%)	1005 (90.9%)	101 (9.1%)	464 (93.9%)	30 (6.1%)
その他	77 (24.3%)	240 (75.7%)	255 (22.3%)	888 (77.7%)	72 (12.2%)	520 (87.8%)
合計	325 (55.7%)	258 (44.3%)	1260 (56.0%)	989 (44.0%)	536 (49.4%)	550 (50.6%)

ここで特徴的な分布として挙げられるのは、対応条件ごとの違いである。標準語において初頭 2 モーラにアクセントがある場合、長崎方言ではどの世代も 90%以上の外来語が A 型に対応する。一方、標準語において第 3 モーラ以降にアクセントがある、もしくは平板型の場合に長崎方言において B 型に対応するというのは 75~87%と相対的に低い。この対応しないパターンには平板型条件と密接に関わる。すなわち、平板型条件に合致していないのに平板型になっているというパターンである。条件ごとに分けた語例を(9)に挙げる。

(9) 平板型条件の例外

a. 4 モーラではないが平板型

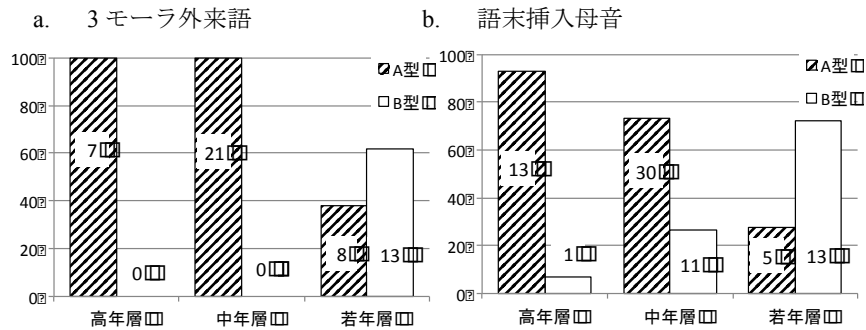
ガラス^ː, キャップ^ː, コップ^ː, ペダル^ː, ペンキ^ː

b. 語末が挿入母音だが平板型

アドリブ^ː, ブラジル^ː, ホノルル^ː, キャラメル^ː, テーブル^ː

こういった特徴を持つ外来語では世代差が特に見られる。(10)は松浦(2014)の調査結果をグラフにしたものである。これらは平板型条件に適合していないにもかかわらず平板型となる外来語で、(10a)は 3 モーラのもの、(10b)は語末に挿入母音があるものの長崎方言におけるアクセント型を示している。

(10) 平板型条件の例外語におけるアクセントの分布 (松浦 2014)



上の事実が示しているのは、長崎方言の若年層話者は外来語のアクセント型を標準語の実際の発音に基づいて決めている側面があるということである。(9)に挙げた外来語は規則性を持たないものである以上、語彙的に決まっていると云わざるを得ない。そのような語を B 型で発音するためには標準語のアクセントが平板型であることを知った上で、初頭 2 モーラに下がり目がある入力に対して A 型を、それ以外のパターンについては B 型を付与するというフィルターのようなメカニズムを仮定しておく必要がある。一方、中・高年層は入力として標準語音声を仮定する必要はなく、標準語のアクセント規則と同じ規則によってアクセントを付与し、そのアクセントの位置を参照するトーンメロディー付与規則を仮定することによって説明できる (松浦 2014)。

1.2. 目的

それでは、このような標準語音声を入力とするような変化は「外来語」というような特定の範疇だけに起きているのだろうか。文字が影響しないと仮定するならば、外来語と和語を区別する方法は限られてくる (深澤・北原 2004) ことから考えると、特に若年層では和語も外来語と同じように標準語音声を入力としたようなアクセントの分布になっていることも十分ありうる。また、名詞や動詞といった品詞による違いも関わりうる。そこで、本稿では和語 (名詞・動詞) および漢語におけるアクセントの分布を中・高年層と若年層の間で比較することによってこの問題について検討する。そして、アクセントの変化に語種、品詞による違いが見られるという事実を指摘し、両者が入力の段階で何らかの形で区別されていることを主張する。

2. 調査方法

話者は高年層・中年層は松浦(2014)と同じ3名である。若年層は2名である。いずれも長崎市(及び周辺)にて言語形成期を過ごしており現在も在住している。話者の情報を(11)に示す。

(11) 話者情報 (ID, 生年, 性別)

a. 中・高年層

KNY29f, 1929年生, 女性

TNS47f, 1947年生, 女性

TKF53f, 1953年生, 女性

b. 若年層

YMK77f, 1977年, 女性

KDY84f, 1984年, 女性

調査は筆者たちが面接して調査票の読み上げによって行った。アクセント型の記録はその場で行ったが, 必要に応じて録音データも使用した。調査票の詳細については各節で述べる。

3. 名詞のアクセント変化

3.1. 調査語彙

本節で調査対象としているのは、和語名詞と漢語名詞である。和語名詞は五十嵐ほか(2014)を参考にし、260語を選定した。これらの多くはいわゆる類別語彙であり、長さは1モーラが24語、2モーラが74語、3モーラが162語である。

漢語名詞は、松浦(2014)のリストを参考にし、2から4モーラの二字漢語250語を選んだ。長さは2モーラが6語、3モーラが114語、4モーラが130語である。これらの標準語アクセントは第1モーラにアクセントのある語が58語、第2モーラにアクセントのある語が3語、第3モーラにアクセントのある語が2語、平板型の語が187語である。なお、調査語彙については稿を改めて全て示す予定である。

3.2. 結果1: 和語名詞

3.2.1. 伝統的なパターンとの対応

まず和語名詞のアクセントを取り上げる。伝統的には長崎の2モーラ

和語名詞は A 型が類別語彙の 1・2 類に対応し、B 型が 3・4・5 類に対応する。3 モーラ和語名詞では A 型が 1・2 類に、B 型が 3～7 類に対応する³。

大局的分布を見ると、中・高年層において A 型のトークンは 324 個 (41.7%)、B 型のトークンは 453 個 (58.3%) であった。一方、若年層において A 型のトークンは 162 個 (31.2%)、B 型のトークンは 358 個 (68.8%) であった。

(12) 和語名詞のアクセントの大局的分布

	A 型	B 型	合計
中・高年層	324 (41.7%)	453 (58.3%)	777
若年層	162 (31.2%)	358 (68.8%)	520
合計	489 (37.6%)	811 (62.4%)	1300

次に、中・高年層と若年層の間的一致について見ていく。中・高年層において安定して A 型だった (全員が A 型) 94 語では、若年層において A 型のトークンが 107 個 (56.9%)、B 型のトークンが 81 個 (43.1%) だったのに対し、中・高年層において安定して B 型だった 134 語では、若年層において B 型のトークンは 236 個 (88.1%)、A 型のトークンは 32 個 (11.9%) だった。

(13) 世代間での型の対応

中・高年層	若年層	トークン (割合)
A 型	A 型	107 (56.9%)
	B 型	81 (43.1%)
B 型	A 型	32 (11.9%)
	B 型	236 (88.1%)

このように、中・高年層から若年層の間で生じているアクセント変化は A 型から B 型への変化の方が B 型から A 型への変化に比べて多いと言える。

³ 3 モーラ 3 類は対応が不規則になるため認めるものではない (金田一 1974)。

3.2.2. 標準語との対応

本節では、中・高年層と若年層の間で型が一致していない語を詳細に観察し、アクセントの変化が標準語の影響によって引き起こされている可能性が高いことを指摘する。1節では、長崎方言の外来語のアクセントは標準語のアクセントと強い対応関係があることを述べた。もし、和語名詞でも同様のことが起こっているとすると、標準語のアクセントパターンと長崎方言の型の分布には対応関係が見られるはずである。

以下では世代の中で安定して出現したアクセント型に集中して議論する。まず A 型から B 型に変化した語の標準語アクセントを見ると、その多くは標準語において平板型である。ただし、平板型だからといって B 型に変化しやすいといは必ずしも言えず、世代を問わず A 型だった語を見ると、ここにも平板型は多く含まれている。平板型の語だけで見ただけでも変化したのは 14 語で変化していないのは 15 語と拮抗している。つまり、標準語において平板型であることはアクセントの変化を引き起こす要因であるとは言えるが、平板型であればアクセントは必ず変化するとは言えないのである。

(14) 標準語アクセントから見たアクセント変化の分布

a. 中・高年層 A 型→若年層 B 型

	1 モーラ語	2 モーラ語	3 モーラ語
第 1 モーラ	2	1	3
第 2 モーラ	—	0	0
第 3 モーラ	—	—	0
平板型	9	1	14

b. 中・高年層 A 型→若年層 A 型

	1 モーラ語	2 モーラ語	3 モーラ語
第 1 モーラ	0	6	5
第 2 モーラ	—	6	8
第 3 モーラ	—	—	0
平板型	0	4	15

同様に、B 型から A 型に変化した語の標準語アクセントを見ると、全体としてその数は少ないが、ほとんどが標準語において第 1 モーラにアクセントがある。ただしこれについても上と同じで、第 1 モーラにア

アクセントがあるからといってアクセントの変化を起こるわけではない点に注意したい。むしろ B 型は変化しにくいという一般化の方が妥当である。

(15) 標準語アクセントの分布

a. 中・高年層 B 型→若年層 A 型

	1 モーラ語	2 モーラ語	3 モーラ語
第 1 モーラ	0	1	4
第 2 モーラ	—	0	0
第 3 モーラ	—	—	0
平板型	0	1	0

b. 中・高年層 B 型→若年層 B 型

	1 モーラ語	2 モーラ語	3 モーラ語
第 1 モーラ	11	12	7
第 2 モーラ	—	10	9
第 3 モーラ	—	—	0
平板型	0	3	36

3.3. 結果 2 : 漢語名詞

本節では、まず長崎方言における漢語のアクセント型と標準語の対応関係を記述する。松浦(2014)では、長崎方言の A 型は標準語で第 1 モーラ・第 2 モーラにアクセントがある語に対応し、長崎方言の B 型は標準語で第 3 モーラ以降のモーラにアクセントがある語と平板の語に対応することを示している。本研究では、漢語は 2 モーラから 4 モーラの 250 語を調査した。これらのうち、標準語で第 1 モーラ・第 2 モーラにアクセントがある語が 62 語、それ以外の語が 188 語である。

大局的分布を見ると、中・高年層では A 型のトークンが 184 個 (24.5%)、B 型のトークンが 566 個 (75.5%) だった。そして、若年層では A 型のトークンが 84 個 (16.8%)、B 型のトークンが 416 個 (83.2%) だった。

(16) 漢語アクセントの大局的分布

	A 型	B 型	合計
中・高年層	184 (24.5%)	566 (75.5%)	750
若年層	84 (16.8%)	416 (83.2%)	500

合計	268	982	1250
----	-----	-----	------

世代別に上述した対応関係を観察する。中・高年層において標準語のアクセントと対応が見られたトークンは 709 個で、一致率は 94.5%であった。一方、若年層では対応が見られたトークンは 457 個で、一致率は 91.4%であった。このように、世代間に大きな差異はなく、どちらも松浦(2014)で指摘されているとおり、高い一致率を見せる。

しかし、標準語との対応は、A 型と B 型では大きく異なっており、世代間による違いも見られる。まず、標準語において第 1 モーラ・第 2 モーラにアクセントがある 62 語を検討する。これは、長崎方言の A 型に対応するはずのものである。全トークン 305 個のうち、A 型が 240 個、B 型が 65 個で一致率は 78.7%である。世代別に見てみると、中・高年層では 183 個のうち 158 個が一致し(86.3%)、若年層では 122 個のうち 82 個が一致している(67.2%)。このように、若年層での一致率が著しく低下しているのである。

次に、標準語において第 3 モーラ以降にアクセントがある語と平板型の語 188 語について検討する。これは長崎方言の B 型に対応するはずのものである。全トークン 945 個のうち、A 型が 28 個、B 型が 917 個で一致率は 97.0%と A 型に比べ高くなっている。世代別に見てもほとんど違いはなく、中・高年層では 567 個のうち 541 個で一致し(95.4%)、若年層では 378 個のうち 376 個が一致している(99.5%)。

(17) 漢語アクセントの世代別分布

a. 中・高年層

	A 型	B 型	合計
初頭 2 モーラ	158 (86.3%)	25 (13.7%)	183
それ以外	26 (4.6%)	541 (95.4%)	567
合計	184	566	750

b. 若年層

	A 型	B 型	合計
初頭 2 モーラ	82 (67.2%)	40 (32.8%)	122
それ以外	2 (0.5%)	376 (99.5%)	378
合計	84	416	450

以上の結果をまとめると、標準語の初頭 2 モーラのアクセントと長崎方言の A 型との対応の方が、標準語のそれ以外のアクセントと長崎方言の B 型との対応に比べ弱い。さらに、長崎方言の A 型と標準語の初頭 2 モーラのアクセントの一致率を見ると、高年層から若年層にかけて低くなっている (86.3%→67.2%)。つまり、漢語のアクセントについては、若年層において、標準語アクセントとは無関係に B 型への変化が急速に進んでおり、このアクセント変化が標準語との対応のずれという形になって現れているのである。

3.4. 語種によるアクセント変化の違い

本節では、前節までに見た和語・漢語・外来語におけるアクセント変化をまとめ、語種間の比較を行い、共通点と相違点を述べる。

和語におけるアクセント型の対応は、中・高年層において A 型の語が若年層において B 型で発音されるという形が大勢を占めていた。この変化は標準語において平板型の語に多く見られた。中・高年層から若年層にかけて見られたアクセントの変化は、若年層のアクセントが標準語の影響を受けて変化したからだと考えられるが、これは平板型の語を B 型にするという限定した形で現れている。

漢語のアクセント型は、標準語と強い対応関係を見せる。標準語において第 1 モーラ・第 2 モーラにアクセントがある語は長崎方言では A 型、第 3 モーラ以降にアクセントがある語と平板型の語は長崎方言では B 型に対応している。しかし、この対応関係は若年層で弱くなっており、若年層では A 型から B 型へのアクセント変化が生じている。

外来語については、1.1 節で述べたとおり、標準語において第 1 モーラ・第 2 モーラにアクセントがある語は A 型、第 3 モーラ以降にアクセントがある語と平板型の語は B 型に対応している(松浦 2014)。この一致率は若年層で特に上がっている。松浦(2014)では、若年層の方が、標準語の実際のアクセントと対応させているためであると考えている。

3 つの語種間で共通しているのは、アクセントの変化の方向である。和語、漢語、外来語ともに A 型から B 型への変化が多く見られている。また、複合語においても長崎方言では前部要素が長くなると複合語は B 型に中和する (松浦 2014)。なぜ語種や語構成を超えて A 型から B 型への変化が多く見られるのかは不明であるが、ひとつの事実として記録しておくことに価値はある。

一方、語種間で異なるのは、標準語アクセントとの対応である。漢語

や外来語では標準語アクセントとの間に強い対応関係が見られる。一方、和語ではこの対応関係が弱くなる。ただし、和語でもアクセントが変化した語に注目すると、多くは標準語アクセントとの対応が見られる。また、漢語では対応関係は強いものの、若年層の間で B 型の方向に中和が起こりつつある。

4. 動詞のアクセント変化

4.1. 調査語彙

調査語彙は次の方法で選定した。まず、上野善道氏作成の『アクセント調査票 B (私家版)』を使用し、1 モーラから 5 モーラの動詞 299 語について、高年層・中年層話者に対して調査を行った。このうち 3 名の話者に一貫して同じ型で発音された語に絞り、明らかに複合的な動詞を除いたものの中から 229 語を選び出し、若年層の調査語彙とした。

4.2. 結果

まず、大局的な分布について報告する。世代ごとのアクセント型の分布を見ると、中・高年層では A 型が 105 語 (45.9%) だったのに対し B 型が 124 語 (54.1%) だった。一方若年層では A 型のトークンが 216 個であったのに対し B 型のトークンが 242 個 (52.8%) だった。

(18) 動詞のアクセントの大局的分布

	A 型	B 型	合計
中・高年層	105 (45.9%)	124 (54.1%)	229
若年層	216 (47.2%)	242 (52.8%)	458
合計	321 (46.7%)	366 (53.3%)	687

次に世代間での一致率について報告する。中・高年層で A 型だった動詞は若年層において A 型のトークンが 102 個 (98.1%) で、B 型のトークンが 4 個 (1.9%) だった。

(19) 世代間のアクセント型一致率

中・高年層	若年層	トークン (割合)
A 型	A 型	206 (98.1%)
	B 型	4 (1.9%)
B 型	A 型	10 (4.0%)
	B 型	238 (96.0%)

なお、若年層が共通して中・高年層と一致しなかった動詞は「勝つ」(中・高年層 A 型：若年層 B 型)、「待つ」(中・高年層 A 型：若年層 B 型)、「起きる」(中・高年層 B 型：若年層 A 型) の 3 語だった。

4.3. 品詞によるアクセントの変化の違い

上で示した結果は、品詞によってアクセント変化の進み具合に違いが見られるということを示している。具体的には、動詞は名詞に比べてアクセントが変化していないのである。この傾向は長崎方言に限られず見られるもので、そもそも諸方言でのアクセントの対応を見ると、名詞よりも動詞の方が対応を明瞭に示す⁴。しかし、品詞の違いがなぜアクセント変化において違いをもたらすのかは不明である。名詞と動詞は形態的、統語的に異なることは確かであるが、構造的な違いがあるとしても、それがなぜアクセント変化の違いに現れるのかも解決されない。また、品詞という違いがアクセント変化に見られるならば形容詞ではアクセントの変化が起こっているかということも問題になるだろう。

5. 結論

それでは第 1 節で設定した、方言における標準語音声を入力とするようなアクセントの変化は特定の語種 (外来語) や品詞 (名詞) でのみ起こるのかという問題について検討しよう。これまでに得られた結果から標準語との接触によると思われるアクセント型の変化に関する知見をまとめると(20)のようになる。

⁴ この点は本稿のもとになったワークショップのコメントにおける上野善道氏の指摘による。

(20) 標準語との接触によると思われるアクセントの変化

- a. 変化の起こる語種：和語, (漢語), 外来語
- b. 変化の起こる品詞：名詞
- c. 変化の方向：A型→B型が支配的

この結果を見ると、語種は問わずに名詞であれば標準語のアクセントと対応する形でアクセントの変化が見られたとほぼ言えそうである。しかし、標準語のアクセントが影響するのは標準語アクセントが平板型である場合に限定される。また、品詞についても名詞では変化するが動詞では変化は起こりにくいことから、標準語アクセントの影響は限定的なものだと考えた方がよいだろう⁵。

しかし、なぜ変化がA型からB型という一方向に限定されるのか、また、なぜ変化が名詞という範疇に限定されるのかという問題に対する答えは今のところない。前者の疑問に関しては、長崎方言話者のアクセントの知覚が関係するかもしれない。杉藤(1978)は長崎方言話者の標準語アクセントの知覚は無アクセント(福井)方言話者ほどではないが、大阪方言話者の知覚より劣り、○[○]で記されるような拍内下降を持つ語でも○|○と同じように判断する割合が高いことを示している。杉藤(1978)の検討しているのは拍内下降を持つ場合であるが、もし長崎方言話者が拍内下降を持たない平板型について異なる知覚を持つならば、知覚がアクセントの変化に関与したという可能性が見えてくるだろう。

次に後者の疑問に関しては、形態的な構造や統語的な役割の違いなどいくつかの可能性が考えられる。その1つとして、和語動詞が極めて閉じた類(closed class)に近いことがあるのかもしれない。一般に閉じた類には機能語が該当するが、動詞の場合、新造語が可能なのは漢語動詞やいわゆるル言葉(例:パク、ダベ)ぐらいだと思われる。しかし、この仮説については長崎方言内部ではほぼ検証のしようがないため、他方言・言語でのアクセントやトーンの変化に着目する必要があるだろう。

謝辞

本稿の執筆にあたり話者としてご協力頂いた方々に感謝申し上げます。本稿は日本言語学会第147回大会ワークショップ「標準語との接触

⁵ 漢語については標準語との接触なのか、独自の変化なのかを判別しがたい部分があるためここでの議論に含めていない。

による方言アクセントの変化」(2013年11月24日, 於:神戸市外国語大学)における同名の口頭発表に基づいております。発表に際してコメント・質問を頂いた方々にも感謝申し上げます。本研究の一部は JSPS 科研費 (No. 26244022) の援助を受けています。

参考文献

- 五十嵐 陽介・平子 達也・松浦 年男・荒河 翼 (2014) 『日本語諸方言アクセントデータベース: 2014年10月14日版』(未公開電子データ)
- 上野 善道 (1989) 「日本語のアクセント」杉藤美代子(編)『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻』東京: 明治書院.
- 金田一 春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究: 原理と方法』東京: 塙書房.
- 杉藤 美代子 (1978) 「単語アクセントの発話と知覚における個人差及び方言差の定量的研究」『言語研究』74, pp.57-82. (杉藤美代子(1998)『日本語音声の研究 5 「花」と「鼻」』(和泉書院)に再録)
- 平山 輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』東京: 学界之指針社.
- 深澤 はるか・北原 真冬 (2004) 「日本語の語彙層と単語らしさの関係について」 音声文法研究会(編)『文法と音声』4, pp. 145-160, 東京: くろしお出版.
- 松浦 年男 (2014) 『長崎方言からみた語音調の構造』東京: ひつじ書房.
- Kubozono, Haruo (1996) Syllable and accent: Evidence from loanword accentuations. *The Bulletin* (Journal of Phonetic Society of Japan) 211, pp. 71-82.
- McCawley, James D. (1968) *The Phonological Components of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.

Tonal Change in Nagasaki Japanese

MATSUURA, Toshio
(Hokusei Gakuen University)

SATO, Kumiko
(Nagasaki University of
Foreign Studies)

This paper describes the tonal change in Nagasaki Japanese, which is spoken in and around Nagasaki city. The dialect has two tonal types: Type A tone (falling tone) and Type B tone (non-falling tone). Our fieldwork with native speakers revealed three points regarding diachronic tonal change: (i) tonal change took place in native (Yamato) words and foreign loanwords, (ii) tonal change took place in nouns but not in verbs, and (iii) an asymmetric distribution of the direction of tonal change was found (Type A to Type B was the most common).